

山や本屋だったかと怪しまれた何千冊もの書物などは、あまり浮かばないで、床の間に立てかけてあった夫の愛用のマンドリンであったりする。そして、時には、平和な日に聴いた優しい音色だったりする。

人は絶対絶命、生命の極限と思われるような時でも、心を占めるものは決して苦しいことや、悲しいことだけではなくて、むしろ、その苦難を乗り越えるために励ましとなる美しいものがあることを学んだことを肝に銘じて、よりよき生涯を生き抜きたいと念願してやまないのである。

## 蓬萊の島を後にして

東京都 藤 浦 ム ツ

主人は、昭和二十年三月二十五日に、(当時台北市南門国民学校六年女子組の担任教師で、三月二十日に卒業式を終え、高等女学校の入試発表前) 台湾一三八七八部隊(私立開南工業、商業第五学年生)の学校隊の内務班

長として応召になった。配属将校や他の三班長と共に、三百人の生徒を引率して、台北の北西五キロにある五股国民学校を兵舎とし、主な任務は、陣地構築作業であった。

五月二十五日に、軍隊より一週間の公休が出たので、主人は、当番兵の陳友義二等兵(十八歳)と共に五股国民学校を下った。陳さんは、大稻程(だいたいとうてい)の豆腐屋の息子で、実家に帰った。主人が公休で山を下りるといっているので、私は学校にお願ひして、溪州国民学校の疎開先から竜口町の実家で両親や妹たちと主人の帰りを待った。私は主人の入営後、子供がまだなくて一人身だったので、南門校の溪州疎開学園に疎開していた。

五月三十一日は、主人が休暇を終えて帰営する日であったが、昼頃からB29による台北大空襲があった。近くの台北一中に爆弾が落ち、火災を起こし、その煙が家の上空に広がって流れた。私は、家の裏庭の防空壕に父母や妹たちと主人と一緒に息をひそめて空襲の終わるのを待った。裏庭の水槽に台北一中の近くに落ちた爆弾の破片が飛んできて、真っ二つに割れて、中に入っていた金魚や魚がとび出した。

三時頃空襲解除になり、主人が兵舎に帰るので途中まで送って行くと、台北一中校舎は爆弾による火災でひどく焼けており、その前の台北植物園内の建功神社の鳥居も爆弾で吹き飛び、植物園前の南門国民学校前の道路には、直径十メートルもあるすりばち状の爆弾の跡があった、空襲のすさまじさを物語っていた。

主人が兵舎に戻ると、陳友義二等兵が帰営していないので、翌朝十人の学徒兵と共に兵舎を出て、大稲程の陳友義二等兵の家に行くことになった。大稲程の家の近くで聞くと、一家の入っていた防空壕に爆弾が落ちて全員死亡したとのことであった。家の近くに大きな煙突があって、そこを目がけて爆弾を落としたという人もいた。同行の学徒生全員で弔意を表し、市の依頼で爆死した者三百人余りの遺体をトラックで運ぶのを手伝って、三枚橋墓地に埋葬して死者の霊を葬ったという。

終戦の紹書を主人は五股の兵舎で聞き、私は溪州の疎開学園で聞いた。これで戦争も終わったと思う安堵と、何か心の中に空虚なむなしさを感じた。主人は、残務整理があって帰宅したのは十月の中旬であった。南門国民

学校に復職したが、学校はすでに中国の警察学校になっていた。児童数二千数百人もいた南門国民学校は、寿国民学校に合併されていた。内地に引き揚げる人もいて、南門国民学校の児童数は減少していた。主人は、六年男女組の担任となったが、学級の児童数は四十人ぐらいで当時としては少なかった。

日本への引き揚げが昭和二十一年三月二十六日に集結と決まった。その間主人は学校へ、私は義妹の店へ手伝いに行った。夜八時頃家に帰ってくると、行きどまりの道を入るところが、ちょうど公学校の裏門のところまで門番をしていた中国からきた兵隊が私のほうにピストルを向けた。私はドキッとして二、三軒先が私達の家なので、私の家、私の家とくり返して言ったが、中国人には日本語がわからず、私はあわててマイホーム、マイホームと言いながら家のほうを指さすと、それまでピストルを向けていたのをやめてくれたので、家にとびこみ、鍵をかけて、電気を消してしばらく静かにしていた。それから三、四日した夜、家に帰ってみると鍵がこわされて、二人のレインコートや着物等が盗まれていた。台湾人の古着屋

を見てまわったが見あたらない。

引き揚げの日、集結場所の東本願寺に集まった。台湾人の共学生（学級に二、三人いた）が見送りにきてくれた。基隆港よりリバティに乗船した。

同僚で後輩の潮地さん（故人）一族も一緒であった。私は妊娠三か月であったので、日本への旅、一週間あまり気分がすぐれなかったが、和歌山県田辺港に入港した。

親戚は東京都内に多かったが、いずれも戦争のため近県に疎開していた。義母と義弟（昭和二十年十月、八王子空襲で殉職死亡）の待つ東京芝浦電気株式会社小向工場の社宅、悟雲荘に落ちついた。主人はすぐに東芝小向工場総務課に勤めさせてもらうことができて、いちおう生活は安定したが、妊娠中に私に出る栄養品（バターやチーズ）などもすべて切符制で、しかも行列買いであった。会社では、土曜日は買い出し休暇としてくれたので、毎週主人は、埼玉県の羽生付近まで食料品の買い出しに行った。しかし、義弟も死亡していることであり、いつまでも東京小向工場社宅にいるわけにもいかないので、私が以前三井物産台北支店に勤めていた関係で、主人は

東京中央区の三井物産機械部月島工場（自動車修理工場従業員数百人）の庶務課につとめ、その構内にある社宅に住むことができた。土曜日は買い出し休暇日であったので、主人は近県に食料品の買い出しに大わらわであった。昭和二十一年十一月に長女が月島工場内で誕生した。

## 私の戦争体験記

沖縄県 牧野 清

発病・召集・入院闘病生活の記

昭和十六年十二月八日、日本海軍は真珠湾を攻撃。日米開戦。この翌日私の父強義は死んだ。享年七十九歳であった。当時私は、業務を開始したばかりの台湾石炭統制株式会社勤務していた。

昭和六年二十二歳で渡台した。この地に自らの新しい人生を築くためであった。就職難の時代ではあったが、幸いに台湾総督府殖産局商工課に採用され、夜学で勉強、翌昭和七年五月文官普通試験に合格、昭和十四年任官し